

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700731

研究課題名(和文) 障害のあるトップアスリートにおける自己変容プロセスの因果モデルの構築

研究課題名(英文) Examination of a Theoretical Model of Self-transformation in Para-athletes

研究代表者

内田 若希(Uchida, Wakaki)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・講師

研究者番号：30458111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：研究1の目的は、中途障害のパラアスリートを対象とし、自尊感情の多面的階層モデルの検証および身体的自己知覚とデモグラフィック要因との関連性の検証を行うことであった。この結果、多面的階層モデルは支持されなかったが、スポーツドラマチック体験によって身体的自己知覚が規定されることが明らかになった。研究2では、聴覚障害のアスリートを対象とし、性別および競技レベルによる自尊感情の差異の検証および自尊感情と年齢、競技年数、およびスポーツドラマチック体験との関連性の検証を目的とした。この結果、スポーツドラマチック体験が有意に自尊感情を規定することが示された。

研究成果の概要(英文)：STUDY 1: The primary purpose of this study was to investigate the multidimensional hierarchical model of self-esteem in para-athletes. The second purpose was to determine if physical self-perception was related to various demographic variables. Results indicated that physical self-worth did not mediate the relation. Regression analysis indicated that physical self-perception was determined by DSE. STUDY 2: The purpose of this study was to examine differences in self-esteem by gender and the level of competition in sport in deaf athletes. An additional purpose was to assess the association of self-esteem with age, length of participation in sport, and DSE. Regression analysis indicated that DSE significantly predicted self-esteem subscales except public self-consciousness. Thus, DSE can enhance some aspects of self-esteem.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：スポーツ科学

キーワード：自己変容 スポーツドラマチック体験

1. 研究開始当初の背景

自己の基本構造および運動・スポーツを通じた変容メカニズムを明確化するため、Fox & Corbin (1989) は自己概念に関する多面的階層モデルを提示した。このモデルは、運動・スポーツに伴う身体的変化(運動・スポーツ能力、体力、体型、および筋力の向上)に伴い、これらに対する満足感や自己評価が影響を受け、ついで身体的側面全般に関する知覚が向上することで、最終的には自己概念の主要因である自尊感情もが向上することを示唆するものである (Figure1)。

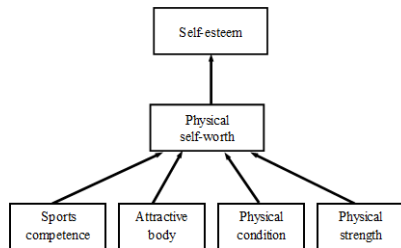


Figure 1. A Hierarchical Model of Self-Esteem (Fox and Corbin, 1989)

近年、自己に関連する研究の枠組みとして多面的階層モデルの利用が推奨されている (Baldwin & Courneya, 1997)。そこで、申請者は、従来の理論モデルの応用研究として、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルに準拠して、中途脊髄損傷者における運動・スポーツを通じた自己変容プロセスの検討を行ってきた。その結果、中途脊髄損傷者は、受障により身体機能や身体部位の喪失を経験し、それまで存在してきた身体的側面(身体能力、体型、筋力など)に関する知覚の喪失や価値あるものの喪失を経験し、自己が揺らぐことや、運動・スポーツを通して、失われた身体的側面に関する知覚が再定義されることで価値の転換が生じ、受障による喪失感からの脱却や生きる意味の再定義がなされることを明らかにし、運動・スポーツを通じて、自己の可能性へ挑戦する機会を提供する意義を提唱してきた。

ところで、スポーツ競技への参加過程において、試合での逆転劇、予想を覆す試合結果、重要な他者との出会い、厳しい訓練の克服などは、多くの選手が体験する出来事である。このような、練習や試合の中で体験される、人生の転機ともなるような心に残るエピソード、つまり「スポーツドラマチック体験(橋本, 2005)」は、自己変容を促す環境や時間・人・行動といったダイナミックな関係性をもたらすとされる。そこで、図1のモデルに準拠しつつ、「身体的自己知覚」という身体的側面から、当事者の視点のみを切り口にするのではなく、様々な障害のあるトップアスリートを対象に、「スポーツドラマチック体験」を軸にしてよりダイナミックな関係性を踏まえた変容プロセスを探っていくことを目指すこととした。

2. 研究の目的

事故や病気のために身体機能や身体の一部を喪失することは、生活上の急激な変化や様々な喪失感、社会的存在の変化をもたらす経験である。一方、スポーツ競技への参加過程において体験される人生の転機ともなるような心に残る体験は、自己変容を促す環境や時間・人・行動といったダイナミックな関係性をもたらすものである。そこで本研究では、障害のあるトップアスリート(ハイパフォーマンスなパラアスリート)を対象に、スポーツドラマチック体験の自己変容への影響を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

研究1の方法

1) 調査対象者

日本パラリンピック委員会傘下の全競技団体(61団体, 1176名)に対し調査票を郵送し、記入後返送してもらった。研究1では肢体不自由者を対象とすることから、非該当の障害および欠損値のあるデータを削除し、最終的に122名を対象とした(男性90名, 女性32名; 38.5±9.66歳)。

なお、倫理的配慮に関して、研究の目的、内容、個人情報保護、調査への回答および辞退の権利、問い合わせ先などに関して、文書にて説明し同意を得た。本研究は九州大学健康科学センター倫理委員会の承認を受けて実施した。

2) 質問項目

(1) 個人特性要因

性、年齢、障害の種類、受傷時期、スポーツ経験について回答させた。

(2) 自己肯定意識尺度

平石(1990)によって作成された自己肯定意識尺度を用いた。この尺度は自尊感情の主要素である自己肯定意識に関して、対自己領域(自己受容4項目、自己実現的態度7項目、充実感8項目)および对他者領域(自己閉鎖性・人間不信8項目、自己表明・対人的積極性7項目、被評価意識・対人緊張7項目)の2つの領域に分けて測定するものである。「あてはまらない=1点」から「あてはまる=5点」の5段階評定法で、合計得点が高いほどポジティブな自己肯定意識を有していることを意味している。

(3) 日本語版身体的自己知覚プロフィール改訂版 (PSPP-J改訂版)

内田・橋本(2004)によって作成されたPSPP-J改訂版は、多面的階層モデルに準拠した尺度であるPhysical Self-Perception Profile (PSPP; Fox and Corbin, 1989)に基づいて作成されたものであり、包括的身体的自己知覚としての「身体的自己価値」と固有の身体的自己知覚としての「スポーツ有能感」「体調管理」「魅力的なからだ」「身体的強さ」を含む身体面に対する知覚を測定する5因子各4項目で構成される。回答形式は、「まったくそうでない」—「かなりそうである」の4件法

であり、得点が高くなるほど身体的自己知覚が高いことを意味する。

(4) スポーツドラマチック体験尺度

阿南 (2010) によって作成されたスポーツドラマチック体験尺度改訂版 (Revised Inventory of Dramatic Experience for Sport-form2; RIDES-2) を用いた。この尺度は、ケガの克服やケガでの成長などに関する「ケガ体験 (4 項目)」、重要な他者からの励ましなどに関する「激励体験 (4 項目)」、ピンチや重要な場面での劇的なプレイによる勝利などに関する「自己貢献体験 (4 項目)」、勝てる試合や格下の相手での負けからの成長などに関する「試合失敗克服体験 (4 項目)」、ピークパフォーマンスの発揮などに関する「フロー体験 (4 項目)」、チーム内での人間関係や問題の解決などに関する「チーム内問題解決体験 (3 項目)」、目標としていた大会やレベルの高い大会での成功などに関する「成功試合体験 (3 項目)」の 7 因子 26 項目から成る。回答方法は「まったくあてはまらない = 1 点」から「非常にあてはまる = 5 点」の 5 段階評定法で、下位尺度の合計点が高いほどスポーツドラマチック体験量が多いことを意味している。

研究 2 の方法

1) 調査対象者

研究 1 と同様の手続きを踏まえ、研究 2 では聴覚障害者 112 名を対象とした (男性 66 名、女性 46 名; 26.9±7.42 歳)。

2) 質問項目

研究 1 と同様のものを用いた。

4. 研究成果

研究 1 の研究成果

理論モデルの多面的階層性構造を検証するために、相関分析および偏相関分析により検証を行った。Fox (1990) によれば、身体的自己価値が自尊感情と 4 つの下位概念の間の媒介変数となるためには、身体的自己価値が自尊感情と最も強い関係性を示すこと、4 つの下位領域が自尊感情と比較し、身体的自己価値と強く関連すること、身体的自己価値の影響を除外した際に、自尊感情と 4 つの下位領域の関係性が減少し、かつ 4 つの下位領域間の関係性も減少することが必要である。

この結果、Fox (1990) の条件のうち複数の観点で統計的な基準をクリアできず、身体的自己価値が、自尊感情および 4 つの下位領域の媒介変数として機能していないことが示された (Table 1 および 2)。本研究の結果は、車椅子バスケットボール選手を対象とした Ferreira & Fox (2008) の研究と同様の結果を示した。中途身体障害者は、身体能力に関する喪失を経験し、それを調整しなければならない (Tasiemski et al., 2004)。加えて、中途身体障害者は、様々な心理的・身体的・社会的な問題と向き合う必要がある (Hanrahan,

2004)。それゆえ、身体障害とともに生きるアスリートは、包括的な身体的自己知覚である身体的自己価値ではなく、4 つの下位領域が自尊感情にとってより重要な意味をもつ可能性が示唆された。

Table 1

Zero-order and Partial Correlations Between PSPP-J, Controlling for Physical Self-worth

	Physical self-worth		Sports competence		Physical condition		Attractive body	
	Zero	Partial	Zero	Partial	Zero	Partial	Zero	Partial
	Sports competence	.53**	—					
Physical condition	.57**	—	.70**	.53**				
Attractive body	.72**	—	.57**	.32**	.54**	.23*		
Physical strength	.60**	—	.59**	.39**	.55**	.32**	.68**	.44**

Note: * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 2

Zero-order and Partial Correlations Between PSPP-J Subdomains and Self-esteem, Controlling for Physical Self-worth

	Self-esteem			
	Intrapersonal		Interpersonal	
	Zero	Partial	Zero	Partial
Physical self-worth	.30**	—	.32**	—
Sports competence	.24**	.10	.53**	.45**
Physical condition	.39**	.28**	.54**	.46**
Attractive body	.22*	.01	.36**	.20*
Physical strength	.33**	.19*	.28**	.12

Note: * $p < .05$, ** $p < .01$

つぎに、身体的自己知覚への年齢、競技経験年数、受傷経過年数、およびスポーツドラマチック体験量の規定力を検証するために、重回帰分析を実施した (Table 3)。この結果、すべての身体的自己知覚の要因において、スポーツドラマチック体験のみが有意な規定力を示した。

Table 3

Standardized Beta Weights from Demographic Variables and Dramatic Experiences in Sports to Physical Self-perception

	Physical self-worth ($R^2 = .04$)	Sports competence ($R^2 = .06$)	Physical condition ($R^2 = .10$)	Attractive body ($R^2 = .04$)	Physical strength ($R^2 = .16$)
Age	-.01	-.00	-.01	.02	-.03
Length from onset of disability	-.09	-.14	-.18	-.16	-.15
Length of time participating in sport	.14	.04	.08	.09	.06
Quantity of dramatic sports experiences in	.22*	.28**	.33**	.25**	.42**

Note: * $p < .05$, ** $p < .01$

つまり、エリート・パラアスリートにおいて、

年齢や競技歴、受傷経過年数などの時間の長さではなく、スポーツドラマチック体験といった体験の量がより重要であるといえる。

研究2の研究成果

聴覚障害のあるアスリートにおいて、性×競技レベル(国際大会経験有無)の2要因分散分析を実施した。この結果、性および競技レベルにおける有意な主効果および交互作用は認められなかった(Table 4)。Crowe(2003)は、男女のヒエラルキーのない支援的な環境下では、自分自身に良い感情を抱くことを示している。とくに、手話を使用する環境下では、言語的・文化的な支援を得ることが期待される(Crowe, 2003)。デフ・スポーツにおいては、手話の使用が求められており、男女ともに肯定的な自己意識が形成されている可能性がある。

I Participation II Gender	International				Non-international				F		
	Male (n=35)		Female (n=24)		Male (n=31)		Female (n=22)				
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
Intrapersonal											
Self-Acceptance	17.4	2.41	17.6	2.30	16.6	3.47	17.2	2.47	.59	1.30	.10
Self-Achievement	30.1	4.73	28.8	5.36	28.2	5.44	29.6	4.68	.00	.58	1.88
Life Satisfaction	28.9	4.18	29.2	6.03	28.6	7.34	28.8	5.77	1.05	2.83	.02
Interpersonal											
Negative Relationships with Others	16.5	7.14	15.5	6.22	18.3	7.28	19.7	4.53	.36	5.09	.92
Self-Disclosure	26.1	3.88	25.6	5.92	24.5	3.87	25.7	4.39	.14	1.17	.92
Public Self-Consciousness	18.2	4.57	18.1	6.30	20.9	6.94	18.3	6.13	1.24	2.32	1.01
Quantity of Dramatic Experiences in Sport	102.4	14.21	98.1	13.62	93.6	19.44	95.3	17.98	.22	4.10	.88

Note. IDES = Inventory of Dramatic Experience for Sports

自己肯定意識尺度の各因子に対し、年齢、競技歴、およびスポーツドラマチック体験量の及ぼす規定力を検証するために、重回帰分析を行った(Table 5)。この結果、被評価意識・対人緊張を除くすべての因子において、スポーツドラマチック体験量のみが有意な規定力を示した。

Table 5
Predictors of the Components of Self-esteem (Beta Coefficients)

	Self-Acceptance (R ² = .20**)	Self-Achievement (R ² = .22**)	Life Satisfaction (R ² = .06*)	Negative Relationship s with Others (R ² = .11**)	Self-Disclosure (R ² = .05*)	Public Self-Consciousness (R ² = .01)
Age	-.14	-.11	.11	-.18	-.01	-.10
Length of Time Participating in Sport	.02	.02	-.11	.01	-.07	.17
Quantity of Dramatic Experiences in Sport	.48**	.51**	.28**	-.30**	.30**	-.11

*p<.05, **p<.01

研究1および2を通して、時間の長さではなく、ポジティブな体験の量が心理面に重要であることが確認された。障害者におけるポジティブな経験の欠如が報告されているが(Tam, 1998)、本研究の結果から、スポーツドラマチック体験が、心理面にポジティブな効果を及ぼすことが示唆された。Lundqvist(2011)は、スポーツ場面における満足感の高い体験が、心理的 well-being にポジティブに影響することを示しており、スポーツ経験の長さではなく、体験の積み重ねがより重要であるといえよう。

本研究では、研究計画を一部変更して実施

したため、質的アプローチによる研究は、インタビューガイドの作成にとどまった。どのように自尊感情が増強されるかを検証することは非常に重要であり、今後はどのような体験をどのように積み重ねてきたのかに関して、より実際の体験に迫り、質的に検証していくことが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- 1) 内田若希・橋本公雄: 大学生のメンタルヘルスの改善・増強に有効な理論モデルの検討—社会的スキルとソーシャル・サポートの互恵性に着目して—。健康心理学研究, 26(2), 83-94, 2013年12月。査読有。
- 2) 内田若希: 今日の体育・スポーツ; ロンドンパラリンピックが提起したものは? 体育・スポーツ教育研究, 14(1), 43-44, 2013年12月。査読無。
- 3) 内田若希・大谷まや: 障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の差異の検討。障害者スポーツ科学, 11(1), 33-41, 2013年6月。査読有。
- 4) 山本浩二・内田若希・山崎将幸: 高校生における社会性測定尺度の開発と部活動および学年間における差異の検討。岡山県体育学研究, 20, 17-22, 2013年2月。査読有。
- 5) 内田若希・甲木秀典・橋本公雄: 心理社会的効果を意図する目標設定およびセルフモニタリングを用いた障害者スポーツ実習—社会的スキルとメンタルヘルスに着目して—。体育・スポーツ教育研究, 13(1), 18-26, 2012年12月。査読有。
- 6) 内田若希: パラリンピック選手に対する心理サポート。体育の科学, 62(8), 576-580, 2012年8月。査読無。

〔学会発表〕(計6件)

- 1) 與田匠・内田若希: スポーツドラマチック体験尺度における因子分析モデルの適合性の検証。九州スポーツ心理学会第27回大会, 福岡市, 2014. 3. 8-9.
- 2) 内田若希: シンポジウム「ロンドン2012パラリンピック競技大会における心理サポート」パラリンピック選手への科学的サポートの必要性。九州スポーツ心理学会第26回大会, 福岡市, 2013. 3. 9-10.
- 3) 内田若希: 学会企画シンポジウム「スポーツ活動の情動的感情の発現と制御に関する研究」情動的感情に基づく研究・実践の必要性。日本スポーツ心理学会第39回大会, 金沢市, 2012. 11. 23-25.
- 4) 内田若希・橋本公雄: 障害のあるトップアスリートにおけるスポーツドラマチック体験の関連要因の検討。日本体育学会

第 63 回大会; 平塚市, 2012. 8. 22-24.

- 5) 山本浩二・内田若希・山崎将幸: 高校生における社会性測定尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 九州スポーツ心理学学会第 25 回大会, 春日市, 2012. 3. 10-11.
- 6) 橋本公雄・藤永博・Rafer Lutz・西田順一・内田若希・Frank Jing-Horng Lu・丁建東・王欣・王世軍: 大学生の運動・スポーツ行動の国際比較—計画的行動理論に準拠して—. 九州体育・スポーツ学会第 60 回記念大会, 名護市, 2011. 8. 27-28.

〔図書〕(計 3 件)

- 1) 内田若希: 障がい者スポーツ. 高橋健夫・品田龍吉・小澤治夫・友添秀則 (編著). ステップアップ高校スポーツ. 大修館書店, pp. 350-353, 2013 年.
- 2) 内田若希: 援助行動の促進を意図した障害者スポーツの体験実習. 橋本公雄・根上優・飯干明 (編著). 未来を拓く大学体育—授業研究の理論と方法—. 福村出版, pp. 257-265, 2012 年 3 月.
- 3) 荒木雅信・内田若希: スポーツの心理的効果: 競技スポーツの立場から. 荒木雅信 (編著). これから学ぶスポーツ心理学. 大修館書店, pp. 152-157, 2011 年 4 月.

〔その他〕

- 1) 内田若希: こころのトレーニング. 働く私のスイッチマガジン OnOff, 159, 3-4, 2013 年 8 月.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 若希 (Uchida, Wakaki)
九州大学・大学院人間環境学研究院・講師
研究者番号: 30458111